

教団新報

定価 1部140円(本体133円+共200円)
予約購読料 1年分 5,000円
紙代のみ 3,500円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話
03(3202)0546
FAX03(3207)3918
発行人 内藤留幸
編集主筆 竹澤知代志



初日夕食後に懇談会、中央・北村常議員、左・東谷常議員

第35総会期

第2回常議員会

能登半島地震に一億五千万円の募金開始

教団総幹事に内藤留幸氏選任

第35総会期第二回常議員会が、七月九・十日、教団会議室で開催された。

組織会では、新しく教区議長に選出された四氏が挨拶した。足田國磨(宮城教区議長)、中越地震救援募金の御礼と更なる協力依頼を述べ、高橋潤(中部教区議長)、能登半島地震救援募金への協力を呼び掛け、宮崎雄雄(東中国教区議長)は、「経常会計五〇〇万円以下の小さい教会が多い。小さい教会を覚えて議論が進みますように」と語った。

また、柴田もゆる(西中国教区議長)は、「地方の教区の問題を共有するために、教区常置委員会による常議員会への提案権回復を訴えた。総幹事報告では、予算決算での款項目変更の是非や

『教団新報』紙記事の見出しについて、セクシュアルハラスメント問題への対応について、等の質疑も行われたが、多くの時間を費やしたのが、山北宣久(教団議長)で、教団出版局宛てに、『信じる気持ち』という題名の単行本の出版停止を要求する文書が出されたことに関するものであった。

山北議長は、「研究書ではなく入門書なので、これが教団の信仰理解と受け取れることを懸念する。事は、復活理解等教団の生命線に関わるものだ。看過出来ない」と、問題点を指摘、「出版停止・回収に値する。しかし、そのような指示はしていない」と説明した。

この件を巡り、本の内容よりもむしろ、議長文書とその公開の是非が議論された。(二面に関連記事)「総幹事選任に関する件」

「常議員会」懇談会開催、議論白熱

総会時の差別発言と未受洗者陪餐問題巡り

常議員会一日目夕食後、常議員懇談会が、多数の陪席・傍聴者も出席して開催された。テーマは、第35回総会での差別発言と未受洗者陪餐問題の二つで、差別発言問題に三〇分間、未受洗者陪餐問題に一時間当てられ、小林貞副議長が議長を務めた。懇談会のため、常議員会の記録には残さず、発言を受けて自由に意見を述べる形で進められた。

まず第35回総会時の差別発言問題では、東谷誠常議員が発題した。部落解放センター委員長でもある東谷常議員は、現在でも結婚などに際し、差別が行われていることを説明して、「未だに解放されていない中にある、35回総会で同性愛者を巡って二人の総会議員が

教団の信仰理解と受け取れることを懸念する。事は、復活理解等教団の生命線に関わるものだ。看過出来ない」と、問題点を指摘、「出版停止・回収に値する。しかし、そのような指示はしていない」と説明した。

この件を巡り、本の内容よりもむしろ、議長文書とその公開の是非が議論された。(二面に関連記事)「総幹事選任に関する件」

発言した内容は、許されないものだ。イエスの言葉を人を排除することに使わないで欲しい。この問題についての学習会を教区、教会、伝道所で行われるよう議案を提案した」と語った。

この発言に関し、発言の趣旨はよく理解しているが、発言した人もまた教会の一員。それを受け入れられないというのも又差別になることも考えて欲しい。この問題は、信仰の本義に戻って考えて行きたい。性別の問題は戸籍システムと関わっている。出生届には性別、嫡子・非嫡子かを書かねばならないが、性別について近年、二分法では割り切れないケースが多々報告されているし、医師の間違ひもあることも考慮すべ

きた「身長を巡っても差別があり、善意の中でも差別発言はある。人間のいるところ差別はある」というのもよい。このことを自覚・自戒することが肝要だ。「被差別地区の女性の結婚式が教会で行われた時、皆で祝福したことが当人、周囲の人の大きな喜び、励みとなった。このことを教会は常に覚えて行きたい」と四人の常議員からの発言があった。

続いて、北村慈郎常議員が聖餐についての発言を二〇分間行なった。北村常議員はまず「沖縄教区不在の中行われた第35回教団総会の聖餐が正しい聖礼典の執行といえるのか」と切り出して、未受洗者陪餐を執行している立場として「教会内で三、四年かけてじっくり

に教憲一条を上げて所信を述べた。

「新潟県中越地震被災教会会堂等再建支援委員会報告」では、小橋孝一委員長から各被災教会の現状が詳細に報告された。特に、「三〇〇〇万円の支出計画増により、献金不足額は二〇〇〇万円となる」と、予算が当初より膨らんだ経緯について詳しい説明があった。

また足田國磨(宮城教区議長)が個々の件について詳細に報告し、「半分の七五〇〇万円を教区として達成したい」と決意を述べた。

山北議長は、献金目標額を「一八〇〇万円に上げることを含めて承認を求めた。別に議案を起した方がいい」という意見もあったが、愛澤豊重総務幹事からの「提案事項を含む報告なので、報告を承認の上、提案を採決したら良い」との説明に基づき、委員会報告が承認され、その後、目標額の増額が可決された。

新潟県中越沖地震

この度の新潟県中越沖地震は、この地域に立てられた諸教会にも甚大な被害を与えた。四面に著したように、日本ホーリネス教団柏崎聖光キリスト教会の礼拝堂・集會室は全壊した。最も被害が大きい地域に位置する柏崎伝道所は、目立った被害はなく、ボランティアセンターとして用いられている。但し、会員宅一軒が大きな被害を受けた。

新井教会は新しくなった会堂は無事、隣接する未だ老朽化したままの牧

師館は心配が残る。正規の検査を受けた後でなければ確かなことは言えない。高田教会は、表面的には何事もなかったように見えるが、土台部分に走る亀裂が心配、専門家の診断を待つ。

「ボランティアセンター運営委員会」が置かれた。志願者は、柏崎教会宛て事前に連絡のこと。宿舎は提供できるが、他のことは各自で。食料は現地調達が可能とのこと。

(二・四面に関連記事)

お知らせ
『教団新報』号を四六三二・三三合併号とし、四六三四号は九月八日発行とします。
総幹事 内藤留幸

いつもの。提案理由では、被災した各教会・関係施設の現況報告が記され、また地域と各教会の財政状況にも触れられた。

高橋潤(中部教区議長)より、地震当初から今日に至る経緯が説明され、「風評被害をおそれ、報道が規制されたため、実際より被害が小さい印象を与えている」と「教会の立地が川に近く土地が液状化した」とこと上程され、大杉弘常議員が議案を朗読した。提案内容は、「再建支援委員会」を設置し、一五〇〇万円を目標額に募金を開始すること

いづ主張は到底承認できない。組合教会の自由をそこまで拡大解釈するならば、組合教会は成り立たない。常議員が公の場でこうした主張を述べたことに大きな衝撃を受けた。こうした議論を聞いて「キリストが段々遠くなる」という信徒の気持ちに教団の取り決め事項としての反論が相次いだ。

陪席・傍聴者からも発言を求める手が多く上がり、「当該教会は議論を積み重ねて執行に至った。教憲規定を定めるときに神学的論議が交わされたのか」「大阪教区では05年から常置委員会が聖餐に関する学習会を開いている」「合同教会の多様性だけを強調して、合同の教会という点に目をつぶっているのは何故か。教憲を教団に代えないというなら、自ら信ずるところに出ればよい」など、熱の入った議論が時間一杯展開された。(永井清陽報)

ねて執行に至った。教憲規定を定めるときに神学的論議が交わされたのか」「大阪教区では05年から常置委員会が聖餐に関する学習会を開いている」「合同教会の多様性だけを強調して、合同の教会という点に目をつぶっているのは何故か。教憲を教団に代えないというなら、自ら信ずるところに出ればよい」など、熱の入った議論が時間一杯展開された。(永井清陽報)

キリスト教入門書の出版問題に議論集中 出版局事業報告並びに決算承認

小島誠志出版局理事長はまず、この一〇年間の一般書籍の売上額が十九%減なのに対し、キリスト教書は二七・五%の減という厳しい状況に置かれていると述べ、決算概況を説明した。出版局の売り上げは、五億円超の期待に対して、前年度を下回る四億六千万円に留まった。その理由として、『信徒の友』と『讃美歌21』のいずれの売り上げもやや減となったことがあげられた。

また、『信じる気持ち』に関して、山北宣久教団議長から意見が出ていることなどについては、秋山徹出版局長が、多方面からの意見が寄せられていることと、出版に至る経過について次のように説明した。

「〇五年四月、出版局の企画委員会第二分科会に職員から立案されたもので、青少年にキリスト教を知ってもらうためにできるだけ平易な入門書を刊行したいという趣旨で、すでに聖書科の教科書として用いられている書物の著者であり中高科教師でもある富田正樹氏が執筆者として提案された。企画委員会ではそれを可として発出し発行に至った。その後、教団三役をはじめ、各方面からこの本の教理的内容について抗議や要望が出された。こういう書物を教団出版局の名で出版されることは問題で出



出版局の事業報告を行う小島誠志理事長

この問題を巡って議論となり、とくに山北議長から出版局長宛に出された抗議の書簡について、向井希夫議長からは文書の扱いについて、午後改めて協議することになった。

「に圧力である」とする意見と、三役の名で出された文書を公表、配布するよう要望が出された。

また、各方面からの賛否両サイドの反響や抗議の内容などについて出版局長からの説明があったが、山北議長からの文書の扱いについては、午後改めて協議することになった。

午後、山北議長から出版局長にあてられた文書の扱いについて議論を経て、文書のコピーが配布された。その文書は、『信じる気持ち』において、イエス・キリストの神性や復活の信仰、聖礼典の相対化が見られることなどから、回収、出版停止、廃刊に値するという意見と、それについて

の説明、対策を求める要望が主な内容となっている。こうした抗議について、議論が交わされた。出版の自由、表現の自由を侵害することになってはならない、教団の機関紙と出版局の役割が違つという意見、また、教団には様々な立場があることを重んじるべきであり、教団議長名で出版局に抗議することはいかが

なものかといった意見も出された。これに対し、教団信仰告白に立ったときにこの書物は問題だと山北議長は判断したのではないかと、議長名で抗議文を出したことを理解する意見もあった。



質問に答える有澤禧年氏(左)、飯塚拓也氏(右)

予算決算諸報告議案を承認・可決

初日午前中「会議室改装に関する件」の審議では、放送設備を整えるべきとの意見があり、愛澤豊重総務監事は「別に見積を進めている」ことを報告した。合見積もりの在り方や、会館全体の耐震問題について疑問を述べる意見もあった

が、賛成多数により可決された。

「予算決算委員会報告の件」では、飯塚拓也予算決算委員長より、会計ソフトの一括導入は難しいので、可能な教区から導入したいという補足説明などがあり、質疑の後承認された。

続いて、飯塚委員長より「2006年度教団歳入歳出予算補正に関する件」、続いて「2006年度教団歳入歳出決算承認に関する件」が提案され、予算補正については「補正をしないで予算を組むべき」という意見が述べられた。飯塚委

員長は、事情を説明の上、この意見を重く受け止め、「補正しないで済む予算を目差したい」と述べた。両件いずれも承認された。

「2007年度第1次補正予算案について」では、「総会を経ずに款の課目変更はできない」という反対意見が出され、計良祐時財務監事と飯塚委員長から

その必然性が説明された後、可決された。

引き続き、東谷誠部落解放センター運営委員長により「2006年度部部落解放センター決算承認の件」「2007年度部部落解放センター予算承認の件」が資料に基づいて説明され、承認された。

(松本のぞみ報)

事務、出版、年金三局の監査報告 業務監査を視野に入れたものに

第二日目午後は、午前より引き続き出版局報告のち、残りの時間、主に

「年金局決算・事業報告」、「監査報告」、「退職年金規則変更」、「在外教師按手札」、「日本伝道150年記念行事」を取り扱った。

「年金局報告」では、高橋豊新理事長が、常任理事を二名増員し六名としたこと、当理事会のもとに資産運用、制度検討の各諮問委員会を新設したこと、資産運用率を総資産の五〇%か

ら七〇%に引き上げ運用の自由度を広げたことを報告した。

また、十一年に亘り業務室長を務めた青地恵氏の退任後、新たに櫻井淳子氏が就任。新室長が決算書により総額五億二千六百万円の収支を報告した。また八千万円を増額し一億一千万円となる謝恩日献金の本年度計画について、奥羽、東北、中部教区等、既に各教区の取り組みが始まっていることを報告した。

事務、出版、年金の三局報告を受け、会計監査委員から監査報告がなされた。

報告は、単なる会計監査からさらに業務監査を視野に入れたものとなってきた。特に総論では、教団全体の教勢を過去十五年に亘り精査し、特に教会学校出席者半減、現住陪餐会員半数が六〇歳以上という現状に「教団の未来に危機感を覚える」とした。また三局連結決算、各教区共通の会計報告実施、会計上の

事故に対する危機管理等が今後の課題である、とした。

「退職年金規則変更」では、六五歳から六九歳までの退職者に適用される減額給付規定を、同年齢内に死亡した現役教職には適用しないこと、終身、有期遺族年金を満額給付することの変更を第二回年金局理事会の決定に基づき提案、可決された。

「在外教師按手札」は、現在、宣教師として派遣されている一教師からの按手願を受け、当面の対応として按手札執行を常議員会議決を経て教団議長が司ることと提案した。

原則、在外教師も教区に属し教区総会議決により按手札を執行するとの判断があるが、実情が伴っていない。教師籍取り扱いが整うまでのこととしての提案であったが、教区の対応等、実情を合わせることを求める慎重な意見もあり継続審議となった。

「日本伝道150年記念行事」については、前回常議員会での議論を受けて議案の修正が提案され、議場はこの修正を承認した。時



年金局の事業報告を行う高橋豊新理事長

第二日目午後は、午前より引き続き出版局報告のち、残りの時間、主に

「年金局決算・事業報告」、「監査報告」、「退職年金規則変更」、「在外教師按手札」、「日本伝道150年記念行事」を取り扱った。

「年金局報告」では、高橋豊新理事長が、常任理事を二名増員し六名としたこと、当理事会のもとに資産運用、制度検討の各諮問委員会を新設したこと、資産運用率を総資産の五〇%か

ら七〇%に引き上げ運用の自由度を広げたことを報告した。

また、十一年に亘り業務室長を務めた青地恵氏の退任後、新たに櫻井淳子氏が就任。新室長が決算書により総額五億二千六百万円の収支を報告した。また八千万円を増額し一億一千万円となる謝恩日献金の本年度計画について、奥羽、東北、中部教区等、既に各教区の取り組みが始まっていることを報告した。

事務、出版、年金の三局報告を受け、会計監査委員から監査報告がなされた。

報告は、単なる会計監査からさらに業務監査を視野に入れたものとなってきた。特に総論では、教団全体の教勢を過去十五年に亘り精査し、特に教会学校出席者半減、現住陪餐会員半数が六〇歳以上という現状に「教団の未来に危機感を覚える」とした。また三局連結決算、各教区共通の会計報告実施、会計上の

事故に対する危機管理等が今後の課題である、とした。

「退職年金規則変更」では、六五歳から六九歳までの退職者に適用される減額給付規定を、同年齢内に死亡した現役教職には適用しないこと、終身、有期遺族年金を満額給付することの変更を第二回年金局理事会の決定に基づき提案、可決された。

「在外教師按手札」は、現在、宣教師として派遣されている一教師からの按手願を受け、当面の対応として按手札執行を常議員会議決を経て教団議長が司ることと提案した。

原則、在外教師も教区に属し教区総会議決により按手札を執行するとの判断があるが、実情が伴っていない。教師籍取り扱いが整うまでのこととしての提案であったが、教区の対応等、実情を合わせることを求める慎重な意見もあり継続審議となった。

新潟県中越沖地震 救援募金のお願い

主の御名を賛美致します。

さて、7月16日(月)午前10時13分に発生した「新潟県中越沖地震」救援のために緊急の募金をお願いいたします。

余震と被害の拡大が心配されるなか、関東教区は被害の大きい新潟県柏崎市の柏崎伝道所に柏崎ボランティアセンターを設置して活動を開始しています。柏崎伝道所も建物に甚大な被害を受け、信徒の方々も倒壊や多大な被害を受けておられます。

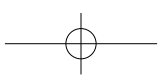
関東教区より全国募金の依頼がありましたので「新潟県中越沖地震救援募金」を行います。どうぞ、諸教会・信徒の皆様のご協力をお願いいたします。

2007年7月18日
日本基督教団社会委員会委員長 張田 眞 記

◎募金期間 2008年3月末
◎目標額 1,000万円
◎送金先 加入者名 日本基督教団社会委員会
◎郵便振替 00150-2-593699

*社会委員会独自の口座です。お間違えのないようお願いいたします。(通信欄に「新潟県中越沖地震救援募金」とお書きください)

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-31
日本基督教団社会委員会



「宣教一五〇年」記念伝道冊子発行へ

第3回伝道委員会

土沢（東和）の町を一望する見事な眺望。土沢駅の背後にある丘の上、土沢城址公園から見下ろすその光景に感動した。

六月二六日（火）～二七日（水）、奥羽教区の土沢教会、花巻教会を会場として第35総会期第三回伝道委員会が開催された。

委員会に先立ち、当委員会が主催する「農」に関する活動者協議会が二五日（月）～二六日午前にかけて、土沢教会で開催された。参加者は四五名。星野正興牧師（東海教区松崎教会・南豆教会）の主題講演「農と教会」と田中洋一氏の発題のあと、現地で農業を営む入江氏、柳谷氏の「わらしべ農園」を見学し、お話を伺い、全体協議の時間が持たれた。



花巻教会の光輝く十字架の前で

部分をはじめとして、まは、等の意見が出された。続いて『「宣教一五〇年」をいかに迎えるか』の件。日本におけるプロテスタン

ト伝道は二年後に一五〇周年を迎える。宣教百周年の際には盛大な催しが開催された。この件は常議員会で継続審議中であるが、伝道委員会としては、幅広い層から伝道レポートや伝道論文等を集め、記念の伝道冊子を発行することが決議された。

また、活動を終了している放送伝道共同委員会の活動資金の使途についても協議した。精算より残金二千七百万円の使途検討の依頼を受け、教団のホームページに立ち上げ等の意見も出されたが、今回は決定を保留し、継続審議とした。

二七日午前は花巻教会を

歴史教科書検定問題等で講演

第2回社会委員会

六月十九日（二〇日、第35総会期第二回社会委員会）が教団会議室にて開催された。上地委員による開会礼拝の後、諸報告を受けた。

主な報告事項は①「能登半島地震緊急救援募金のお願ひ」の全国発送と募金状況の件（六月十二日現在、二九二件、六〇六一、三〇七円）②第一回分五〇〇万円

を中部教区へ送金した件、③四月二七日に死刑執行が行われたことへの抗議と死刑廃止の要望書を内閣総理大臣及び法務大臣へ送付した件、④「憲法改悪に反対する誓願署名」（六九九筆分）を国会へ届けた件、⑤被災した伝道所再建の計画が具体化になったので三宅島伝道所援助金（一〇、六七

七、二七八円）を東京教区へ送金した件、⑥海外で起きた自然災害のその後の救援と協議されている。

今回は委員会内において「日の丸・君が代の法制化」「教育現場に携わっておられる方々のこれからの課題」と題して、飯島信氏（池袋台湾教会伝道師・東京都立中学校教員）より講演を伺った。文科省における歴史教科書の検定問題（「集団自決」の削除）や入学・卒業式の日丸掲揚・君が代斉唱及び伴奏はさらに強制され、これに反対する教職員を排除し裁判となっている。こうした現場での取り組みを報告した講演の内容は、次回「社会委員会通信」にて報告される予定である。また今後は、キリスト教主義学校の現場からも報告を伺い、委員会としての対応を協議していくとした。なお、今委員会にて体調不良により委員一名の辞退者があり、補充を選考委員会に委ねるとした。

「農」と「教会」の関わりを学び、考える

「農」に関する活動者協議会

第六回「農」に関する活動者協議会は、六月二五日から二六日にかけて奥羽教区岩手県花巻市の土沢教会を会場に開催された。各教区などから四五名が参加した。

北紀吉伝道委員長の説教による開会礼拝の後、星野正興氏（松崎教会・南豆教会牧師）による主題講演が行われた。星野氏は、杉山元治郎、賀川豊彦などの日本農民組合運動開始の歴史から説き始めて、教会はどのように「農」に関わってきたか、どうして、教会は「農」に関わるのかを参加者と共に考える講演を行っ

た。

伝道委員会は、機構改正（一九六八年）以前の「農村伝道専門委員会」が担ってきた課題を含めて「農」に関する事項を委員会の重要課題としてきたのであるが、ここでいう「農」とは農業に限らず、神の創造に関わる食べ物、いのちをも含めてこれらを教会の宣教の課題としているものである。その意味で星野氏の講演は、御自分の教会における牧師としての働き・教会の経験の述べながら、その後、後発をされた田中洋一氏（八郎湯教会員、キリスト教農村伝道推進協議会会

長）の発題と共に広く農村にある教会とその宣教のありよう、更には農村の生産物を消費する都会の教会の宣教のありようを問うものであった。

参加者は、会場から十五分ほどのところにある土沢教会員入江牧師の農場「わらしべ農園」も見学させていただいた。

二日目は、主に全体協議を行ったが、地産地消の課題、「農」に関する活動者協議会の今後のありようなど話題は多岐に及んだ。

昼前の解散後、酒匂徹氏のバーマカルチャーによる農業実践を見学させていた



震災後再建された土沢教会を背景に

消息

堀本 淳氏（江古田教会牧

師）四月七日、逝去。五五歳。東京都に生まれる。二〇〇四年日本聖書神学校卒業。二〇〇五年から江古田教会の牧師を務めた。遺族は妻の恵子さん。

田中徹夫氏（大阪九條教会）四月七日、逝去。五五歳。東京都に生まれる。二〇〇四年日本聖書神学校卒業。二〇〇五年から江古田教会の牧師を務めた。遺族は妻の恵子さん。

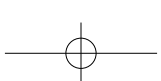
八戸小中野就（主）吉沼祥夫
就（担）吉沼紀美代
新生金石
就（主）柳谷雄介
須賀川
就（担）森松民子
仙台一番丁
就（主）保科 隆
就（担）保科けい子
就（担）望月 修
仙台東
就（主）中井利洋
就（主）中島正勝
仙台愛泉
就（担）小川幸子
仙台北三番丁
就（代）平井孝次郎
就（主）酒井 薫
就（担）杉本 泉
就（主）杉本和生
就（主）上野和明
辞（主）平井孝次郎
就（担）平井孝次郎
就（主）佐藤浩之
就（主）酒井 薫
就（担）倉松 功
就（代）大島 利
就（主）本多 肇
就（主）小倉義明
就（主）松本のぞみ
就（主）近藤野百合
辞（主）三浦國昭
就（主）布村伸一
就（担）鈴木 光
就（担）井上良彦
北陸学院
辞（主）井上良彦

事務局報

教師異動

土浦
就（代）山本隆久
麻生
就（主）白井 真
札幌
辞（主）清瀬弘毅
千歳栄光
就（主）安部 勉
就（代）山本光一
中標津
辞（主）吉沼祥夫
辞（担）吉沼紀美代
就（代）青砥好夫
弘前西
辞（担）コルドウェル・ジョン
大沢
就（担）田中直子
八甲田
辞（代）渡辺兵衛
就（兼主）渡辺兵衛
八戸小中野就（主）吉沼祥夫
就（担）吉沼紀美代
新生金石
就（主）柳谷雄介
須賀川
就（担）森松民子
仙台一番丁
就（主）保科 隆
就（担）保科けい子
就（担）望月 修
仙台東
就（主）中井利洋
就（主）中島正勝
仙台愛泉
就（担）小川幸子
仙台北三番丁
就（代）平井孝次郎
就（主）酒井 薫
就（担）杉本 泉
就（主）杉本和生
就（主）上野和明
辞（主）平井孝次郎
就（担）平井孝次郎
就（主）佐藤浩之
就（主）酒井 薫
就（担）倉松 功
就（代）大島 利
就（主）本多 肇
就（主）小倉義明
就（主）松本のぞみ
就（主）近藤野百合
辞（主）三浦國昭
就（主）布村伸一
就（担）鈴木 光
就（担）井上良彦
北陸学院
辞（主）井上良彦

山形学院高等学校
辞（教）肥田信長
山形本町
就（担）石井美琴
見附
辞（代）熊江秀一
就（主）柳田剛行
日本医療伝道会
就（教）大野高志
北陸学院
就（教）楠本史郎
水街道
就（担）加藤輝勢子
向河原
辞（主）安藤義雄
大和
辞（主）佐々木正実
就（主）安田治夫
栗平
就（主）高橋圭子
船越
就（代）北村慈郎
上倉田
就（担）本多峰子
横浜共立学園
辞（教）小林 宏
横須賀学院辞（教）田邊哲朗
就（教）瀧澤雅洋
就（教）瀧山結実
就（教）小田部実生子
静岡英和女学院
就（教）伊勢田奈緒
就（担）岩見朋子
就（担）石井和典
就（主）金子敏明
就（主）武田真治
辞（主）花谷美千代
京都丸太町
就（担）渡辺圭一郎
就（担）市原 順
京都復興
辞（代）湯木洋一
喜音
就（代）打樋啓史
宇治
就（担）安森智司
就（担）高田 太
長岡京
辞（担）久保見誠
就（担）島田律之
辞（主）中路治代
就（主）辻中昭一
同志社大学就（教）村山盛華
就（担）川合 望
神戸
就（担）田邊哲朗
就（主）田邊哲朗
神戸神愛
辞（代）松原 望
就（主）高多 新
就（主）金田恒孝
就（担）河南一成
就（担）中村悦子



い どんな激震も、希望を奪うことは出来な

七月二〇、二一日、関東教区四役(同行し、新潟県中越沖地震に遭った諸教会を訪ねた。

新井教会は今年七月に百周年を迎えた。記念事業の意味合いもあり、老朽化した会堂を大規模改修、真新しく綺麗にしたばかり。長く信仰生活の誓であった会堂への拘りから、外観等は旧来の姿を残した。そこを襲った大地震、十名に少し足りない会員、礼拝出席者は、会堂が心配で心が揺れ動いたと言

う。「工事を決断していなければ、私たちは礼拝の場所を失っていた」。費用八百万円は、この人数には重い金額だった。しかし、豪雪に備えて建設された会堂は、地震にも耐えた。

新井教会を兼牧する森言一郎牧師は、地震の数十分後には、余震に奮える美樹夫人を高田教会に一人残して、ホテルでの結婚式へと向かった。「生活するためには、働かなければ」とは森牧師の弁。不安が極まった時、電話が鳴った。

大宮教会で「教会間の連帯と宣教協力」をテーマに宣教協議会を持っていた関東教区からのものだった。教区は、この電話で、地震・被害の甚大なことを初めて知った。飯塚拓也副議長は、直後、車で直行した。「後で考えれば、不思議と電話も道路も通じた。もう一時間遅かったら、辿りつくことも出来なかった。宣教協議会で教区の幹部が皆集まっていたことで、即断し対応できた」。

その他のいち早い見舞いに、大いに慰められ、不安な時をやり過ごすことができた、森美樹さんは感謝する。

他の機会に全く逆の話を聞いた

こともある。「見舞客やら電話やらが殺到し、切羽詰まった仕事があるのに、少しもはかどらない。正直なところはありがた迷惑だった」。両方の感想とも当事者の本音。問われるのは、普段からの関係であり、信頼・連帯ということだろう。

訪ねた先々の教会に、関東教区独特の協力伝道推進のための「ナルドの壺献金」のポスターが貼ってあった。壺の表面に教区五県の地図が、土器の文様のように浮かんでいる。県境を表す線が、壺のひび割れのようにも見える。洪水、地震、豪雪、また地震、狙い撃ちのように関東教区を襲った災害、しかし、その度にひび割れが広がるのではなく、むしろ、連帯・協力が強められている。

被害が甚大だったのは、柏崎市周辺。日本ホーリネス教団柏崎聖光キリスト教会は、建て直したばかりで別棟になっている牧師館を除き、礼拝堂も含め全壊した。「もし集会中だったらと思うと、むしろ感謝です。牧師館が残し、明日の礼拝も何とかできます」とは、たまたま研修会で留守をしており、難を逃れた片桐宣嗣牧師。関東教区の訪問をも喜んで受け容れて下さった。

教団の柏崎伝道所周辺には、全壊半壊の家々が目立つ。会員のお宅も一軒が全壊したと聞いた。あまりの惨状に白田宣弘牧師は、伝道所を

地域のためにボランティアセンターとして提供することを即断した。新潟地区・関東教区が、この志の元に、柏崎市とも協力態勢を持ちつつ、運営委員会を設けて、活動を開始している。会堂は人と大道具小道具救済物資で溢れている。寝袋を使ってこる寝でも九人が限界、これを超えた人数は、神学校とキャンプ場を併せ持つ新潟聖書学園が受けて下さることになった。ここでも教団・教派を超えた連帯が生まれる。未だ形が整わない先から、「教会さんなら何かしてくれる」と、支援を依頼してきた隣人もあったそうだ。

柏崎伝道所の建物には、やきもきさせられた後やっとな、安全を意味する緑の紙が貼られた。立ち上げたばかりのセンターを閉じる危機は去った。電気は通じ、ガスも手当できる。しかし水がない。つまり、夜中も暗い道を歩いて仮設便所まで行かなければならない。ボランティアの方々の健康が支えられますようにと祈るばかり。



倒壊した日本ホーリネス教団柏崎聖光キリスト教会礼拝堂

日本基督教団部落解放センター 一泊研修会報告



部落解放センターでは、六月十七日、十八日、京都・ふれあい会館において一泊研修会がもたれた。

発題「部落解放センターの原点について」では、センター設立への歩みについて学ぶことができた。熱い闘争の原点は、差別に対する怒りであった。その闘いは時に激しく、それゆえに敬遠されることもあったであろう。しかし、私は「あなたに本当に怒っているのか」と問われていると思

た。そこで何より求められているのは、他者の痛みに寄り添おうとするセンスであるだろう。

次の「センターが今問われていること」では、現状認識を共有することが課題となった。一九九八年の、日本基督教団常議員会・教団総会における同性愛者差別発言・文書以降、センターは差別と闘うための連帯の行動を起こすべきであった。しかし二〇〇二年には教団総会で性差別問題特設委員会、靖国・天皇制問題情報センターが廃止され、人権のための取り組みが後退させられる中で、やはり

部落解放センターは連帯することができなかった。そして二〇〇六年に教団総会でまたもや同性愛者差別発言があった。それでもセンターは闘えなかった。部落差別問題に関わる一人として自分の罪であることをおぼえる。今一度、私たちは襟を正して、差別のむごさを想起し、連帯の行動を起こさなければ、自分だけが救われればよいという偽善者である。イエスの福音は問いかける。イエスは十字架の死を賭してまで、弱い者の側に立った。それは体制に憎まれることを引き受ける覚悟である。しかしそこに命があると主は示された。私たちは今、この主のみに従うことが求められているように思う。

冒頭と締めくくりには、当事者の話によって被差別の体験を共有した。差別というものがどんな形で人の生活を、幸せを侵すのか、その一例をうかがった。しかしまた同時に喜びをも分かち合い、希望を示された。豊かな研修会が与えられたことに感謝。

(川上幹太郎)



馬淵正昭・京子さん

ペンテコステに 一つとされた！



遠州栄光教会員。建設会社経営・病院事務。

二〇〇二年五月十九日ペンテコステ礼拝にて、馬淵家族はキリストに結ばれて一つとされた。馬淵正昭、京子夫妻の受洗と、萌、芽依、岳、三人の子どもの幼児洗礼に、会衆一同は喜びに満たされた。

正昭さん、京子さんが初めて教会に足を踏み入れたのは、それより十二年前のこと。教会で本物の結婚式をしたい」との動機からであった。それから二人は牧師による結婚準備会を経て結婚し、三人の子どもにも恵まれた。しかしその歩みは決して平坦なものではなかった。本人たちの言葉によれば「お互いに自己中心になり、神様から離れる生活へと流れ、五年間、夫婦別々に暮らした時期があった。

ある主日礼拝後、正昭さんと京子さんは再び家族五人一緒に暮らすことの報告と、それを機に受洗志願を申し出ようと決意していた。奇しくも同じ日、牧師の方は二人に受洗の薦めをするよう示されていた。「啖啄同時」二人は神の御業を深く覚えた。そして、冒頭の洗礼式へと至った。京子さんは「振り返ると、一つとされた出来事は意味深い。

現在、京子さんは教会学校教師として、正昭さんは賜物を活かして会堂管理営繕に奉仕、三人の子どもたちは教会学校やコズベルグループで活躍中。ちなみにペンテコステの「ペンテ」は「五」。聖霊降臨により弟子たちは一つのキリストの体とされた。ペンテコステに五人が一つとされた出来事は意味深い。

文部科学大臣
伊 吹 文 明 様
要 望 書
2007 年 7 月 18 日
日本基督教団
総会議長 山 北 宣 久

日本基督教団に属する私たちは、聖書に示された生き方を基本として、この社会で生活をしています。また私たちの信ずるキリストは、「剣をとる者は、剣で滅びる」と戦争の無益さを教えられました。私たちは、この教えが真理であり、全ての平和に直結するものと考えます。同時にこの姿勢は、憲法第九条とも共通するものであり、日本国民としても、平和のための努力を惜しみません。

しかるに、昨今の日本の状況は、教育基本法が改正され、個人の尊厳に代わり、国家主義に通じる恐れのある愛国心教育が盛り込まれ、さらに憲法改正の準備である国民投票法制定など、再び戦争への道を急いでいるとしか思えません。

また 3 月末の「高校歴史教科書検定」では、太平洋戦争末期の沖縄戦で起きた「集団自決」の記述に関して、「軍命令による自決」の記述を削除・修正する指示があったことを聞き愕然としています。

「集団自決」に関しては、「家永教科書裁判最高裁判決」で、日本軍の関与を明確に認めています。さらに、軍の関与を削除する理由が、係争中の裁判の一方の主張であり、驚きと怒りを禁じ得ません。

私たちは、かつての戦争による惨禍を思い起こすときに、今こそイエス・キリストの教えられた平和の真理に立たざるを得ないと考えております。であればこそ、戦争放棄を謳った憲法を選び取った日本で生活をしているのです。しかしそのような時に、かつての戦争の悲惨を隠蔽・歪曲することは、過去の戦争を肯定することとなり、断じて許すことができません。

キリストの教えに従うと共に、憲法に則り平和を祈る私たちは、文部科学省が、今回の「高校歴史教科書検定の修正指示」を撤回することを求めます。